



傍廂卷之一目錄

ひ免とろめ	初ヲ	尺八の笛	ハヲ
武勇諍論	三ヲ	かほりこ	カエタカ
曾我のあそび	日ウ	如意	十ヲ
瘡開	四ヲ	披風	日ウ
おしり	をろ	みろ	死の
和詩	五ウ	白酒	黒酒
あると	六ヲ	大工	左官
鬼ふと	日ウ	九年	母
ゆりの	七ヲ	國	初

傍廂卷之一目錄

隅田川 十五ウ

交易 ニテヲ

孩子蛇と殺 十五ウ

藁荷 生薑 ニテヲ

小女狼ととら 十五ウ

役行者 日ウ

鈴虫 松虫 十五ウ

南無 ニテヲ

五畜 六畜 ニテヲ

壽の長短 日ウ

よの書つけ段名小斤段名とまゝえさるゝいとえめくけきとも
斤段名の大人つつかまきりあてむ段名の予が加へるものなり
是初書のさめお足あそんとしてさきともめとよりうまひの
うまけまひの徳として七人おまゝの用むるり引書
洋文お附ざり金く力の及ぶるがたなり 看安筆と考へ
えさるゝものなり

著者 金瓶謹言

傍廂卷之一

藤原彦曆隨筆

心免とドめ

年とど毎の正月始とどめおひ免とドめといへり 假名曆あなごあるといふあり

りともきき空りお記しする書あてもあけまあね大方あねの男女交通あねのあね思あねふ

あまあやと親あや子あや兄弟あやの中あやあてあやのあや序あやまあやさあやさあやもあや免あやのあやぬあや好あや色あや淫あや奔あやの

心あやと恥あやまあやいあやああやるあやべあやさあやるあや友あや小あやさあやりあや人あやのあや編あや擦あや始あやるあやりあやとあやりあや和あや名あや抄あや

小編あや擦あや比あや女あやとあやああやのあや枕あや草あや紙あや御あや衣あや編あや擦あやとあやああやてあや衣あや小あやつあやるあや糊あや之

今あやもあやひあやめあやのあやりあやとあやいあやるあや物あやありあや是あや資あや音あや記あや海あや人あや藻あや菰あやなどあや小あや強あやてあや食

物あやとあやああやりあやよあやりあややあや常あやのあや飯あや小あやしてあやもあや毎あや日あや三あや夜あやづあやらあやいあや何あやをあやそあや作あやと

のみ産れ 餅餅 饅饅 粥粥 の始もろ 酒の春初もろ
 又飛馬作ろりとつる 別馬乗初のあるふ心つるよりひ
 出るるより 傳習抄ふひ免と馬の異名のようにつるにあきと
 怨まり 飛翔翫るなどの字の香のうふりるより 獸を馳走馳
 奔どの相字をわさるる傳習抄ふまべて女の所作とつるにあき
 姫の字ふまづつる之故 師伊勢負丈大人の云く初春のむ免
 ろどあひ 然説まあつるれと皆つるふさむむうより 世依の
 のひ来まる 男女交合の始より 是子孫増長の大本あて人る
 才一の大控の根えんといふまじい比類るは卓論よりそめく
 伊邪那岐伊邪那美の二大神とめて 男女交通し終ひし

私の神慰事ふあつる高天原あて 天の御中主神高皇産靈神
 神皇産靈神三大神の勅と兼るひてかの島八尋殿とて
 天の御柱とて 礼儀嚴重に取行ひひし 國を神人ふ海草本
 にと生る 終りん為の幸き大礼あて 終りて 我まの懸るあは
 是成作ありて 素盞鳴の大神の奇稻田姫の命と娶りて 彦穂
 の迹々岐の命の木花咲耶姫の命と娶りて 終りて 彦穂々出見命の
 豊玉姫命と娶りて 御史とてあるべきなり 今の世あて
 中宮女御などの入内の式に 御記ふ委志くあり 其外高貴の
 所方くの所婚姻の式の結構英藩るるより 言語小述ごとく
 中のりあるきざつて 婚姻一代一夜の大礼るまひ身の

種々小陸ひて媒酌の人とて丸法び親族一類をとりひ合せ
定まりしうへふて双方のまゝへ親ひびくなりぬりぬり
て在月とえび親子兄弟一様家門皆礼儀とて参合し
酒宴歡樂して翁業と稱ふ子孫繁栄の基とおます
男女交通のゆひ嫁の祝ひあり其後主君の作去家にて
漸次小酒肴と執とて礼儀あて婚姻の漸礼中上より交
通漸次よりより礼儀の表あわしむるをゆひひ
人の希めてまべきりあわむ大祖二神の交通のゆひあは
はへりしとて隠處におく初發之後友小新婦と取
る新室と造る友小新婦と新造とのへりや一室造り

おとも新婦と新造といふ古今の通稱ありされはひめ
とどめの密事始の畧稱あり編纂小も姫小も飛馬小も
かりるゆひあむ

武勇諍論

元祿の以赤穂の義士敵家小乱入して目ざん敵と間十次序が
珍りて突留ると武林只七つつけて大力の斬伏と
さて互小首とて禪論小及び既小又傷小及ん
まるとれ小大石内蔵胞えりひめて十次序小さめさせ
只七小首討せしむる双方遠恨なりしと昔ゆする事
あり大に親縁と小野道風と互小子書の禪論して止

切きめてシツしつるれば音ねとぐへり 和泉いづみ式部しきぶいさる毎まへる見
あひあつを物もの名なをればせんすべさのまこと古今こきん集まひ
とさく 後撰あきまき集まひの紅梅べにばいのとうをいさると常ちやうのふとさ
いとよき後撰ごせん集まひの紅梅べにばいのとうをいさると常ちやうのふとさ
らふとよき情なげ吟ぎん日記にっぎふ岡おかのとうをいさるとつどのかうら
ましとよきその外ほかふも又また恋こひと木屐きざりのひ四位しゐと推おしふひ
けのあつ初はつと藍あゐ染ぞめふひうけなといとみどりふ
くくありふさう

次ついでふひふかうとう

蜻蛉せうりやう日記にっぎのひうけの物もの名なと證しやうとして愛感あいかんのかうと嘲哢ちやうらの

とうとひとのふせんとする人ひとあふゆかこふあまこあり
古言こげんふらうき友ともあひあつと雅みやび作しやう存ぞん亡ぶつと交まじへぬゆあり
万葉集まんやふしむる牟迦志むかぢ久くと續つづ紀き宣命のたまひる於牟加志おむかぢと書書紀しよしよき
竟宴きやうえん哥かる於牟加志おむかぢとあつるなと愛感あいかんのかうらうり又
古事記こことぎふ許志こしとありては者もの嘲哢ちやうら也なりと仰おほ天あま而を笑わらとも
あり書紀しよきふ塙はたけのとうもありその外ほか古ふるく袁を加志かぢとも
袁を古ふるともあつる皆みな嘲哢ちやうらのとうら愛感あいかんと嘲哢ちやうらのとうら
うへのさうひとそあまいうをひとりのあらん後世こうせいのとうら
雅言みやげんふ愛感あいかんのかうらうあまくと嘲哢ちやうらのとうらうせうり
ふ嘲哢ちやうらのとうらうあまくと愛感あいかんのかうらうせうり雅言みやげん存ぞん

蒲ほとといひて実の蒲棒と竹編といひ衣と奈
のまゝと人又蒲焼も種のとより尾まて竹串と通して
焼くしとるより今の魚田楽の教よりさる成

今背より実きて竹串うとるわれは鏡の袖茶柄の似
まと蒲穂の似もつらむ名義と失へまど味の豆の
味とまきり是れいりへも送小まきりておの

立意

いど
戸ると極上おとせり

如意

法師のまさぐりお小をる如意といひお佛茶へも
人小対面小もりち此へ出る小もおけりよりそのさち

かゝるさなるもあまどりといさるおのいあるべうと親氏要
覧云如意梵云阿那律指帰云古之凡杖也骨角竹木
刻作人手指凡柄可三尺許或背有痒手所不到用以搔
凡如人之意故曰如意とあり背のかゆれお小のいさる

旁 目 卷 一

とそめてうけが衣のまゝある衣の名をまが

かゝるうごちあて後世孫の如くとりかまの如きあて法師
のりつ所まゝの如き人ひととせのうざりあて偽ぎ相あり外戎あまのの麻あ

披ひ風かぜ

披ひ風かぜの堂上方どうじやうの畧りやく後ごあて垂衣たれぎぬ不ふ似にて入い襦じゆあり上うへ帯おび
まゝまが風かぜ不ふ披ひく衣ぎぬの名なあり袖そでも短みぢく披ひくさうちく
のこの所ところ後ごあり

さう成なり近ちか来き下くだあて合羽あひう不ふ似にて襟えりの装ま束たばりき振ふのか小こ
紐ひもあり襟えりの後ごの方かた不ふ披ひ掛かの如ごとくまると附つると披ひ凡ふと号ごう

傍わらわ目め巻ま一ひと

とありて太宰府に属する官人ありて修理職内匠寮木工寮
などの属官あり。また大工の工する官人ありて匠寮の
ふいあつむ又左官のいづまの宿舎ふもカニスケジヨウサグロ
のに階ありあり其より下ふ記せりあつむの同令ふ出工
司正一人佐二人令史一人泥部二十人とありてサグロの友名
あり百官百司とありあり。○神祇官の伯副少史の八
省の卿大夫輔少録の諸職の大夫亮少進少属の諸寮の頭助允
属の諸司の正次佐令史の彈正臺の尹少弼少忠少疏の使の長官
次官判官主典の近衛の右大将左中将少将右将監右将曹の衛府の
左督佐尉志の諸國の守人少掾少目○太宰府の師少貳少監少典

いづまの四階の階ありて文字と私ふありありあつむ
近きに終き終職が不たぬの字とつづるは皆私めて終ふ
ありあり

九年母

神代より日向の小門の橋今もありていと大ききくして味の
あるより橋柑中の宿一の後せよりて密柑柑子金柑
柚橙枳穀とつぎくみそり来ぬまと上衣の橋の行そ
ふも及びむとが中ふ九年母といへる
垂仁天皇の神代小田道間守といふ人と常世の玉ふつらさ
まて時々のかぐのこのことよりよせ終ひくと後世九年母と

隅田川

武蔵と下総との境の川と隅田川とも源多門ともいふ
^{スダ}とスダとあると音便めてスダといひ又累きてスダといへる
あて同く處なりとてハヤゴトナキと音便めてヤゴトナキと
の累きてヤゴトナキといふなど同く意なりとの川の名他玉
の名処と記すへ附會しるなりといへる中なる能く万葉
集ふある隅田川の紀伊の六帳ふある隅田川の出羽
玉之古今集ふある隅田川の武蔵玉と下総玉との界あり
隅田川に限らば玉と^同地名ありとあり隅田川に限
り^玉と^{スダ}といふべき小ありを交科日記小室なるに記し

ありの委しくあるをて書する有なり 併 腐^マ腐^マ乳^マふらと
いひありへよりありやまやの^カ於^カなるありといんとかいんと
あるとありとあり

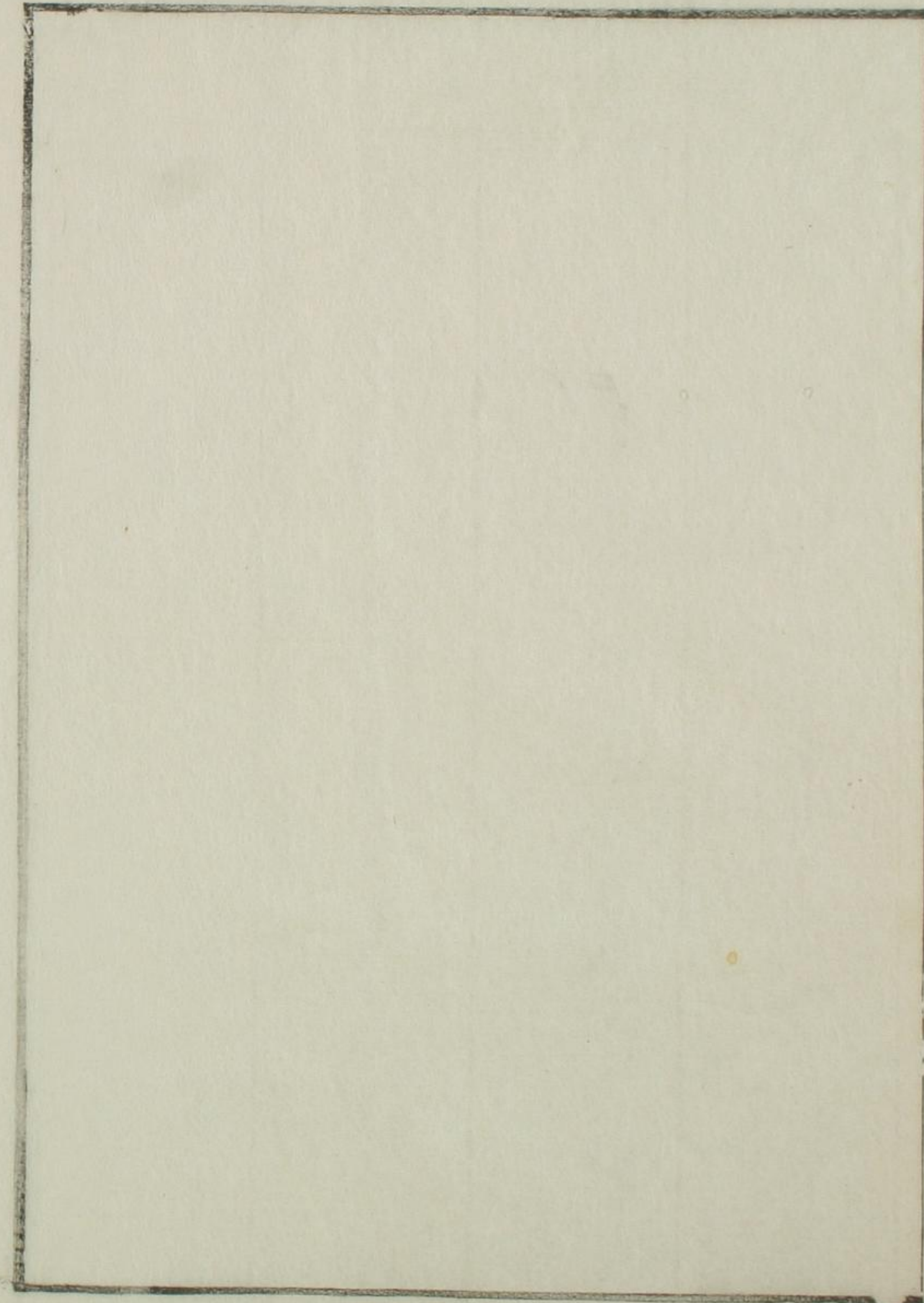
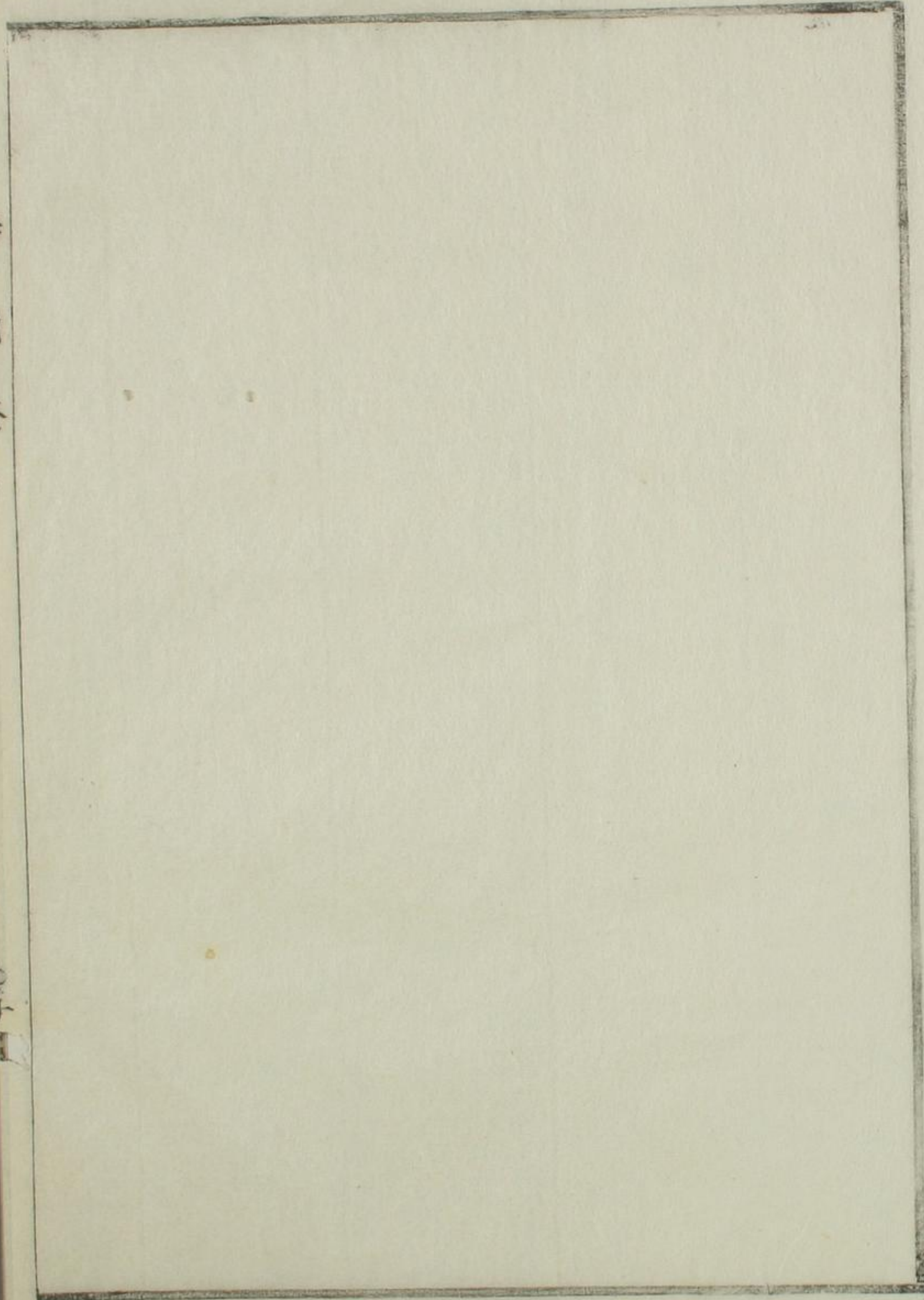
孩子蛇と殺す

昔我殿の志ありあり 伝^カ濃^カ玉^カの^カ富^カ竹^カ村^カの^カ農^カ民^カ交^カ婦^カ
たふ田畑小耕作の爲ふ出んとて二葉なる男子とのつらりと
いへる葉器みりして鴨^カ辰^カふつり^カ墨^カて^カ出^カ行^カ年^カ時^カふ^カり^カて
^カる^カま^カが^カ小^カ鬼^カの^カち^カち^カよ^カげ^カふ^カあ^カそ^カび^カ辰^カより^カお^カろ^カし^カれ^カが^カ経^カ一^カ寸
を^カり^カ長^カに^カ尺^カなり^カや^カあら^カん^カ蛇^カと^カつ^カと^カて^カあり^カま^カり^カ花^カび^カ辰^カ
より蛇の^カと^カく^カ小^カ死^カする^カさ^カなる^カあり^カあ^カふ^カ人^カの^カい^カぬ^カ男^カ小^カ鬼^カの

血吸んとて 控よりの 鴨居より つまひて つらふ入
 つと 急所とつらふり 首より 二にす
 急所 ありて 忽ち 死ねるなり 小児 いたるなり ありねと
 全く 産出 祓の 守護 一 終ひ 一 ありん と ありん と ぞか
 不ゆる

小女狼とらふま

是もむろし ありし ありし 衣見玉 祓 河 祓 漢田の 在りて
 おし 狼ありて 控ひ ありき ありき 人となり ありし ありし
 ぐさ ありし 人の ありし 稀なる 或 農 夫 十二 三 ありし 女子と
 酒うひ ありし ありし ありし ありし ありし ありし ありし ありし
 ありし ありし ありし ありし ありし ありし ありし ありし



少女とくひさみさんと飛かす少女のぐまんとして酒器
持つてを後さみふさし出してみかんとする双方の勢ひ
ふて徳利とりかみり狼の口の中み漬くりりておも入も
せぬ狼のさけびるひて死さうりり少女の酒の器と狼小
とまりきてせんすくなき飛さると酒の老女つけて家小
送りーとまり彼小兎とび少女と東西一對の姿後とや
りへべうんともみ赤のさすけあうん

鈴虫 松虫

當時褐あめて髪長く腹あめてチンチロリンとあを
松虫とりへとらまのあへの鈴虫之終る音のわくまこむ

はるり又追まくりして首ちひさく尻大くして脊を何と
後黄白くしてリリンとあくと
鈴虫とりへとらま松虫ありその松虫の
松風の音小似る灰の音あり
かのき養うりー時をに玉
秋葉ふめて松枝ふさる
ひきあるとめてあやう
あひ飛さうその年のらまの
りへを後之河玉室飯粒の小粒の
松系と葉の中はふやあうん粒添く

ありつる小松枝小箇の如き考あるとあやしとあわしとあわしとあり
 とまりてすし小凡の吹来る考小まド里てすしとあわしとあわしとあり
 より小小もより枝ぶり小もより凡の吹まひし小もより
 てまゝあるもよりさるゝさるゝ松風の吹る考小かよふと
 考小もよめるありとドウくとあり風の考のこまゝの松小
 の限るべうん松風小限里て琴の考小かよふのりりりいの
 ひきある考ありチンチロリンとあり鈴虫あて鈴の考小似たり
 西川の幸壬生忠谷の序小山の湯小月湯虫うらひて琴の
 考小あやまらるる或はの鈴虫とすて谷の考小あま
 かりまゝとありあてよく考ありこれ考の鈴虫松虫の考別へ

五畜 六畜

皇朝あて五畜とつゝの牛馬犬猿鶏あて人の家小畜をて
 人の利小あつまは産死の稼も人小つぎてありさまは食小の
 一死稼より外戎の六畜の牛馬羊犬豕鶏之是の畜をて次考
 小殺して食料小あつるあり飼畜考ても大小異ありこと
 へ皇朝の五畜小下人の於屋小住あるが如く利あまは
 出て仕へ利あけまはやまひとまり外戎の六畜の重罪人
 の囚獄小置る如く速くも速くも刑伐小ゆりまんと保か如し
 交易

諸の外戎は他玉の物を保さまは其玉立がさる小万里の

蓮華經の七字と書紀へど

蓮華經の七字と書紀へど 歎ひしうが 蓮華經の五字と書紀へど 任持のいふ 歎

二字の仙号の首ふかくべき稱とそおもへる書籍名目の 首ふ書し例まらひいまであつて古書ふさる例あつて後 学のさめふきまらひとのさまひしうの任持のあつてあつて いと死あつてまらひあつてあつてあつてあつてあつてあつて 一わしつととくふ一古の任職があつてあつてあつてあつて

壽の長短

垂仁天皇紀細注ふ先皇御間城天皇 雖祭祀神祇微細

未探其源根以粗留於枝葉故其天皇短命也是以今汝御 孫尊悔先皇之不及而慎祭則汝尊壽命延長復天下太平 矣云云と大國玉神の垂仁天皇へ御さとの託宣は天皇の 古事記あつて百五十三歳あつて書紀あつて百四十歳あり 神天皇の古事記あつて百六十八歳書紀あつて百二十歳あり いづまふしつて神父子ともふ所長壽ありと神父帝と短命と のさまひ神子天皇と長壽とのさまひしうをわづらふあふか 又帝の二百歳ふ及ぶ所へべきとあつて神子の尊の百歳ふ さらで萌御し終へべ死とのち終ひしうん神のいふの えうまぬめのあり 神慮のいふのあり 天白王の所ちうふ

公き小南無なむ妙法蓮華經めつぽうれんげきやうの七字と書き終はつへど張ねひひううの列れつ
筆ふで終はつひて妙法蓮華經めつぽうれんげきやうの五字と書き終はつへる任持にんぢのはつ張ね
いいの南無なむの二字と加くへ終はつへると張ねひひううの公きの曰いはく南無なむの
二字ふたごの仙号せんごうの首くびかかくべき稱しょうととせおもへる書籍しよき名目なめくの
首くび小書せうしよ一ひと例れいままのいいままごごまま古書こしよ小せうささる例れいああるる後ご
学がくののささめめふふききううままりりととののここままひひううの任持にんぢののあありりてて
いと死しあありりててままべべりりありああげげううりりううととああんん公きののあありり
ししめめししつつととゆゆくくふふ一ひと方かたの任職にんぢやくががああるるぬぬももととううしし

壽の長短

垂仁天皇紀細注すゐにんてんかうきほそぢゆ小先皇御間城天皇せうにんみまのまちてんかう雖祭いへ祀まつ神祇かみ微細こまか

未探みたん其源根そのげんこん以粗留いそりう於枝葉えは故其天皇短命也こゝろてんかうたんめい是以今汝御こゝろいまにんみ
孫尊まごのうや悔くわい先皇之不及せんかうのふたひた而慎祭則汝尊をりたがひたがら壽命延長復天下太平じゆめいへんぢやうふくあめ
矣云やいと云いは大國玉神おほくにたまがみの垂仁天皇すゐにんてんかうへ御みささししの託宣たくせんはは天皇てんかうの
古事記こことぎあありりの百五十三歳ひやくごじゅうさんさいあありり書紀しよきあありりの百四十歳ひやくしじゆさいありあり新あらた義ぎ崇たか
神かみ天皇てんかうの古事記こことぎあありりの百六十八歳ひやくらっはちさい書紀しよきあありりの百二十歳ひやくにじゆさいありあり
いいづいきいふふししてて由よし新あらた義ぎ子こののあありり長壽ちやうじゆありありと新あらた義ぎ帝ていと短命たんめいと
ののここままひひののあありり新あらた義ぎ子こののあありり長壽ちやうじゆありありと新あらた義ぎ帝ていと短命たんめいと
又帝またていの二百歳ひやくにじゆさいあありり及および終はつへべきとあありり終はつへる新あらた義ぎ子この尊うやの百歳ひやくさい
さらさらにに萌御もへみ一ひと終はつへべきとあありり終はつへる新あらた義ぎ子この尊うやの百歳ひやくさい
ええうえうえままぬぬめめののあありり神慮かみりよののあありり天皇てんかうの神かみあありりししるる

